

シリーズ・編集部座談会《こんな話&あんな話》

産業界を挙げて始まりつつあるウイズコロナ時代の働き方革命
建設・電設業界はこの苦難の時代をいかにして乗り切るのか①

【出席者＝本紙編集部一同】

☆アフターコロナからウイズコロナの時代へ

司会者 今週もコロナ関連の座談会になるんだけど、テーマはズバリ「アフターコロナからウイズコロナへ」ということ。アフターコロナという言い方が盛んにされていたのは、5月頃までだった。世の中は自粛々々で動いていたけど、新型コロナ騒動も夏を過ぎれば収束に向かうのではないかな。

その頃には特效薬やワクチンの開発にも具体的な進展がみられるのではないかと、どちらかといえば、楽観論が支配的だったよね。自粛をはじめてすぐ「アフターコロナ」という活字がマスコミを賑わせたのも、早くも「収束後」に目が向いていたからだろう。

記者B 夏になったら気温上昇に伴ってウイルスの動きも鈍るとかいわれてもいましたよね（笑）。ところがそんなことはまったくなくて、国によって落差はあるけど、終息どころか収束にもなっていない。経済活動はその間に世界的に疲弊しはじめて、今は日本も含めてちょっと先行きが混沌としているというのが、正直なところですよ。

司会者 そうなんだ。それで夏頃から「アフターコロナ」が「ウイズコロナ」に取って代わられたわけだ。本紙でも5月頃にいちやく、「アフターコロナ」をテーマに業界企業の代表の方々に話をうかがってシリーズ記事も掲載したよね。だけど、今月からは「ウイズコロナ・シリーズ」を掲載していくべく、目下、取材を進めているところだ。経済界の動きをみてもこの流れはもう主流で、すでにいろいろなことが行われているだろう？

記者A そうですね。コロナとの共生を前提に進めていかないと、経済活動も方向性がみえてこないというのが、もはや国民的な共通認識だと思います。

記者C アフターコロナが語られていた頃は、だから

対症療法的な話が多かったですよね。マスクをどうするとか、リモートをどのように取り入れていくかとかいう感じで。

司会者 それがウイズコロナになると、対症療法から根本治療に向かうような、企業としての在り方、つまり基本理念の部分から変革していかないといけないような状況になりつつあると思うし、事実、それをすでに始めているところは少なくない。

今週と来週はそうした諸々をテーマに、みんなで話し合いたい。そこで今回は、まず世の中の趨勢を、こちらで一度、概観しておきたい。業界企業への取材に基づく、業界内のウイズコロナ対策に関する座談会は来月にやるとして、今月はまず、業界を包み込む世の風潮を整理していきたいと思う。

記者A 世の中の趨勢ということであれば、形として分かりやすいのは観光業界と飲食業界でしょう。それから演劇やコンサート、スポーツ興行などを含むエンタメ業界ですよ。

新型コロナ騒動で真っ先に影響が直撃したのも観光と飲食、エンタメ業界ですから。そういう意味でウイズコロナ時代をいちばん先じて考えているのも、観光と飲食、エンタメなどではないでしょうか。先手を打ったというより、そうならざるを得ないのだと思いますけど。

記者D 私もその通りだと思います。それらの業界はまず移動の自粛と三密回避への動きが、真っ先に影響した業界といえます。しかも国の方針では、いわゆる不要不急の産業みたいな範疇に、入れられてしまっていたような感がある。つまり、国民が生きていくためにはさほど必要ないとされたわけです。あれは悔しかったらうなあ。

司会者 そうだったね。映画や演劇、コンサートなど

*本文、後略